

閉会挨拶

原正一郎（京都大学地域研究統合情報センター副センター長）

Shoichiro Hara (Center for Integrated Area Studies, Kyoto University)



皆様、5日間にわたり、本国際シンポジウムおよびワークショップにご参加いただき、まことにありがとうございます。主催者の一人として、心より感謝申し上げます。

さて、2011年3月11日に、我々は大地震と津波、それに伴う原発事故という一連の災害を経験しました。その災害直後、「想定外」という言葉がよく使われました。「これほどの大地震は想定外だった」、「10mを超える津波は想定外だった」等々です。

しかし、地震学者は869年の地震と津波の再来を懸念しており、ボーリング調査等による地震像の解明を進めておりました。そして成果を公表する直前に、今回の災害が発生しました。原子炉についても、初期仕様以上の津波が到来する可能性や、電源途絶によるメルトダウンの危険性等が指摘されていました。

このようにさまざまな情報が存在していたにもかかわらず、それぞれの情報は分散しており、他人には存在すらわからず、まして共有もされず、結局、これらの情報を活かすことができませんでした。私は、今回の災害は情報災害でもあったと感じています。

今回のシンポジウムおよびワークショップにおけるキーワードを使えば、「知識」が共有化できなかったということです。2011年3月11日の災害については、情報が共有されていればという恨みが残ったできごとです。一方、災害直後から膨大な量の情報がインターネットに発信され、災害時におけるインターネットの重要性が改めて明らかになりました。いずれにしても、多様な情報を蓄積し、公開し、利用できる情報システムの重要性が再認識されました。

今回、この国際シンポジウムおよびワークショップに参加して、アチェおよびインドネシアにおいても、情報共有やシステム開発について日本と同様の考え方や動きがあることがわかりました。例えば学校における防災教育の展開、災害ツーリズムの展開、博物館による資料収拾・整理・公開、専門機関によるハザードマップの作成や災害情報システムの構築等、さらにさまざまな専門的なフォーラムを組織してのデータ構築等です。

それぞれの活動は誠にすばらしいものと感銘を受けました。また、それぞれの組織や機関が専門性を活かしたデータベースを構築したかあるいは構築中であるということにも感銘を受けました。

ところで、データベースには、

1. 資料を「知識」として蓄積して継承する
2. 多様な「知識」を共有する
3. 多様な「知識」を利用する

の3つの機能あるいは役割があると考えています。これに従えば、アチェにおける災害データベース作成の試みはまだ最初の段階であり、データが共有されているとは言い難い状況であることもわかりました。また、リスク評価のための基礎データや評価基準が異なっており、これらがデータ共有や処理の障害となりつつあるという意見もありました。これは何もアチェに限った問題ではなく、日本にとっても大きな問題となっています。

このような問題を解決して、「知識」を継承、共有、利用できる情報システムを実現することが、いま、情報学に求められている課題です。われわれ地域研究統合情報センターが「地域情報学プロジェクト」を立

ち上げた動機も、まさにここに 있습니다。

一方、「知識」の継承、共有、利用に関する基礎的な情報技術は徐々に整備されつつあります。しかし、これらの技術を本格的に使用とすればさらなる技術革新が必要であるということが、今回のシンポジウムおよびワークショップでも明らかになってきました。また、これらの情報技術は本質的にグローバルなものでありますが、例えば災害システムを構築するのであれば、災害に関する辞書や地名辞書の集成、非常時における情報処理の特性、さらには地域特性などを考慮する必要があります。

そのためには、自分たちの経験を知識として体系化する試行錯誤が必要で、その方法を蓄積していく必要があります。これが地域情報学の活動となります。

我々の地域情報学プロジェクトも、ようやく成果の一部が見えつつあるという段階に過ぎません。我々の経験に、アチェのみなさま、さらにはインドネシアのみなさまの経験を加えながら、地域の知を蓄積し、それぞれの地域の特性にあった災害情報システムを一緒に開発することはまことに意義のあることだと確信いたしました。

その際に、今回のように、英語などの第三国の言語を介さずにインドネシア語と日本語による対話できたことは非常に良かったと痛感しました。担当者の方々のご苦勞は大変だったでしょうが、今後もこのような形式の対話が継続されることを希望いたします。

最後に、今回の国際シンポジウムおよびワークショップを第一歩として、今後の展開がより実り多きものになることを希望いたします。